

氏 名	エダマシコ 江 田 雅 子
学 位 の 種 類	博 士 (音 楽)
学 位 記 番 号	博 音 第 171 号
学位授与年月日	平 成 22 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉シューベルトの歌曲 “Am bach im Fruhling” など計20曲 〈論文〉シューベルト歌曲における描写の視点 ―後期歌曲を中心にみられる表現方法―

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教 授 (音楽学部)	寺 谷 千枝子
(副査)	〃	〃 (〃)	伊 原 直 子
(〃)	〃	准教授 (〃)	平 松 英 子
(〃)	〃	教 授 (〃)	檜 山 哲 彦
(〃)	〃	名誉教授	朝 倉 蒼 生

(論文内容の要旨)

シューベルトの後期歌曲には、未だあまり注目されていない作品があるが、それらの作品を中心に描写の特徴を分析することで、その素晴らしさを再確認したい。本論文では、その芸術性に注目し、作品の中でどのように詩を解釈し描写しているか、またその表現方法について探求したい。

第1章では、シューベルトの生涯とドイツ歌曲について確認し、また女声におけるシューベルト作品について論じた。女声によって実際に演奏される機会が少ないが、より頻繁に演奏されるべきではないだろうか。シューベルトが活躍していた時代から200年近く経つ今まで、その作品が受け継がれていることには何か重大な意味があるように思える。

第2章では、マイアーホーファーの詩に付曲した作品にみられる劇的な作品から場面転換の効果が多く用いられていることがわかる。それはまさに舞台芸術のような小世界を再現しているようにも捉えることができる。照明効果といっても良いほどの多彩な作曲技法によって、その場面と主人公の心情が移り変わる様は、情景さえも蘇らせてくれるようである。シューベルト独自の描写表現の特徴として、「死」について語っているにもかかわらず、「死」を認め、肯定するかのように思える長調を用いる技法がある。また、詩の言葉の「調和」や「響き」について和音の使い方などから繊細な感覚を持っていたことも読み取れる。

第3章では、シュレーゲルの詩による時間や空間の表現について論じる。響きが生み出す綾によって空間の広がりを感じることができ、その世界の持つ空気をも表現することができる。音楽によって、時間や次元、空間といった世界へ誘うシューベルトの作品はまさに芸術作品である。

第4章では、晩年のシューベルト作品にみられる癒しを求める表現を扱った。シューベルトは詩の内容も癒しの表現のものを明確に選択しているが、それまでの作品に比べて、音楽表現においても深刻に行く末を見つめているように感じ取れる。1823年から梅毒の病に苦しみ、常に「死」を意識しながら生活していた頃の後期歌曲には、それまでにはないような陰鬱な描写を読み取る事が出来る。自らの死を予感し、人生に対する肯定をしている状態であったから成せる偉業であったのかもしれない。

シューベルトの歌曲の中には、詩の内容が盛り上がり終わるものにおいても、音楽ではしばしば盛り上がり欠ける終結部が見受けられる。しかし、その何気ない、自然な流れを大切にする作風は再評価すべきである。つまり、シューベルトは自らの解釈のもとに詩の世界を崩さずそのままにし、音楽を

誇張し作曲することなく、詩の中の情感を生かすことによって、詩に音楽を備えた芸術に息吹を与えている。単純であるが旋律が美しく、情感の伴う色彩が広がるシューベルトの歌曲作品は、まさにシューベルト自身を意味するのはいうまでもない。自然体を目指していたのではないだろうか。だからこそ、聴き手としても、演奏家としても、素直に受け入れることができるのだと思う。

ひとりの歌い手として実際に演奏する際、幾つかの作品の中には詩そのものの持っている要素や世界よりも、シューベルトの手によって音楽と一体となることで、より価値のある芸術作品が誕生しているように思える。詩人を尊重したのであろうか、その詩に内在している素晴らしい本質を、むしろ作曲することによって引き出し、その世界へと誘ってくれる。歌い手の立場から詩の言葉や内容と音楽の両面からその世界を読み解くことによって、シューベルトの歌曲を改めて探求したいと思う。シューベルトという作曲家は、歌曲を作曲するにあたり、自らを投影しているともいえる。その素晴らしい歌曲作品は、後世の作曲家に影響を与えただけではなく、今日のわたしたちまでにも鮮明に感銘を与えてくれるのではないだろうか。まだあまり知られていない作品を取り上げることでシューベルトの素晴らしさを改めて知ってほしいとともに、少しでも演奏する際の参考となれば幸いに思う。微力ながらこれらのことを本論文で試みたい。

(総合審査結果の要旨)

本論文は「シューベルト歌曲に於ける描写の視点 ― 後期歌曲を中心に見られる表現方法 ― 」と題し、比較的演奏される機会の少ない後期の歌曲に焦点を当て、第一章に於いてシューベルトの生涯に始まり、女声におけるシューベルト作品にふれ、第二章で「マイアーホーファー作品と劇的表現」、第三章で「シュレーゲル作品と時間と空間の表現」、第四章で「晩年の作品と癒しを求める表現」として特に学位演奏会で歌われる歌曲を中心に楽曲分析と詩の解釈、演奏表現法の分析を試みたものである。

第一章に於ける「女声におけるシューベルト作品」は非常に興味深い視点であったが、深い掘りさげに至らなかった感がある。

第二章、第三章に於けるシューベルトに大きく影響を与えた詩人とシューベルトの関連性から、詩の解釈、楽曲分析、演奏論に至るまで細かく記された。

第四章に於いて晩年のテーマとして「死」と「癒し」がいささか表面的かつ観念的であるように見受けられる。

全体を通してシューベルトを敬愛する申請者の、演奏家の視点からの愛情と共感の溢れた、実践的な研究として納得のできる内容と評価できる。

演奏審査会は平成22年2月8日に芸大奏楽堂に於いて、シューベルトの後期作品を中心に“Am Bach im Fruhling”で始まり、“An de Mond”に終わる、さまざまな詩人によるあらゆる形式の歌曲20曲が演奏された。

2年のドイツ留学を経て得た詩に対する深い理解と共感とともに、知的な音楽性と透明感のある美しい声質で情緒豊かに表現された。

発声の問題点として響きの低さから来る音質のムラと音程の不安定さが上げられ、旋律線の自然な流れと自然な音色が今後の課題として残ったが、技術的にも音楽的にも難易度の高いプログラムに意欲的に取り組み、内容の充実した高水準の演奏は評価できるとし、論文、演奏とともに学位取得に値するものとして「合格」とした。